

「原爆の日」

2022年08月09日

広島は8月6日、77回目の「原爆の日」を迎えた。毎年、テレビで式典が放映されるが、今年は、特別な「原爆の日」になったのではないか。ロシアはウクライナに軍事侵攻し、国境線を変更しようと、21世紀には考えられない蛮行に走った。ところが、ウクライナの強力な抵抗にあい、侵略が思うように進展しないことにいら立ち、また、米国・北大西洋条約機構（NATO）の参戦を警戒し、核使用をちらつかせ、恫喝するような発言をしている。核は抑止力として働いていたが、現実的に使用される危機感を煽った。また、北朝鮮は、核抑止力は万全の体制である。自国を攻撃する国には壊滅的な報復をすると豪語している。核使用が現実味を帯びて来たので、「原爆の日」を緊張ある日として迎えた。

毎年、広島から発せられる平和メッセージは注目されているが、今年は、特に熟読した。心に残った言葉を転載したい。松井一実市長は格調高く「広島平和宣言」を読み上げた。「とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、1945年8月6日地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにしなければなりません。また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは今改めて『戦争と平和』で知られるロシアの文豪トルストイが残した『他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ』という言葉をかみしめるべきです。」ウクライナ侵略戦争で、生きることを否定する残虐行為の上にロシアの幸いは断じてない。以後、何百年に渡って、ロシアの非人間的行為は忘れられることなく、記憶されるだろう。取り返しのつかない敗北を味わうことになる。

子どもを代表して、小学校6年生のバルバラ・アレックス君と山崎鈴さんが「平和への誓い」を読み上げた。「戦争は、昔のことではないのです。自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとすることです。本当の強さを持つれば、戦争は起こらないはずです。過去に起こったことを変えることはできません。しかし、未来は創ることができます。」世界の政治家たちは、自分は強いと言い張り、肩をいからせて闊歩している。子どもの目には、吹き出すような滑稽な姿に見えるということである。「共にある」ことが、真の強さであることに気付いてほしい。そのために、平和な未来を創る勇氣と知恵を出し合う世界になることが求められている。

グテレス国連事務総長は12年ぶりに広島を訪れ、明快なメッセージを語った。「私たちは、核の脅威に対する唯一の解決策は核兵器を一切持たないことだと認識しなければなりません。指導者たちは自らの責任から隠れることはできません。彼らに対する私のメッセージはシンプルです。核という選択肢を取り下げてください。永遠に。被爆者の方々のメッセージを聞き入れてください。『ノーモア・ヒロシマ。ノーモア・ナガサキ』」国連は、拒否権を持つ国々の横暴によって、平和への道が閉ざされているのが現実である。グテレス氏はじめ、平和を求める世界人たちは、国連が正常に、そして、強力に平和を推し進める機能を果たしてほしいと願っている。人間はいかに愚かで、罪深いかを知らされるが、「原爆の日」に出されたメッセージが生かされる日が来ることを信じて、核兵器廃絶に生涯をささげた坪井直氏の「ネバーギブアップ」の精神を継承したい。核廃絶、平和は、主権を持つ国民一人ひとりの声を集約していくことで実現する。